

2018年1月7日<降誕後 第1主日・新年 礼拝>飯川雅孝牧師

招詞：イザヤ書40：27－31 聖書：創世記1章1－5節

説教：『初めに、神は天地を創造された』

1. 一年の計と聖書の初めの言葉

皆さま、新年あけましておめでとうございます。「一年の計は元旦にあり。」と言われております。「一年の目標や計画は最初の日である元日に立てるべき。」ということでもあります。今年何をやったらよいか、すでに皆様の頭に浮かぶことがあると思います。昨年の暮れに若い青年がご家族と一緒に教会に来て「3年前にガイドをいただいた方針に従って修士課程で学び、今ようやく世の中に出て行く方向付けができました。」とお礼に来てくれました。この年齢になって、若い方に語ることはその状況に合わせて当たり前のことを言うのに、時には「言葉」がその方の進路に影響することがあることに自重の念を禁じ得ません。旧約聖書は「初めに、神は天地を創造された。」新約聖書のヨハネによる福音書も「初めに言があった。言は神と共にあった。言は神であった。」と、文字通り、初めに神が良しとされるように、目的をもって世界を創造されたことを語っております。今日の箇所は、聖書全体の方針を決める一番初めでありますから、それを編集した祭司たちにとっては我が身を削るようなあまりに重たい思いをしたと感じます。しかし、多くの方にはその神学的な意味を考える時間を取られたことがあまりないと思います。せっかくの機会ですので、ご一緒にその意味を抑えておきたいと思います。

2. 創世記冒頭の意味とイエス・キリストの出現によりその意味はどう変わったかということを考えて見たいと思います。

創世記の1章の内容は数百年もかけて成長して来たものでありますし、成長しながら慎重に豊かさを加えて作り上げられて来た祭司の教理、つまりキリスト教の教えであります。そこには祭司的な知識の粋がこの上なく集約されて収められています。それは旧約の思想にとどまらず、新約の時代になってイエス・キリストによって開花させられます。

わたしたちの美登里幼稚園では、今日の冒頭の言葉に続けて、世界の創造、アダムとイヴの創造、エデンの園、楽園喪失、カインとアベル、バベルの塔、ノアの洪水、アブラハム・イサク・ヤコブの族長物語、モーセによる出エジプト、12部族のカナン侵入までのお話をしております。中には「神さまは人間を一番後に造ったんだよね。」とか「幼稚園は大工さんが造ったんだよ。」とかいぶかる子もおり、園児たちは物語のところどころに感じたり、驚いたり、素直な反応をしてくれます。今日の冒頭の天地創造の物語を土台としてその上にこれらの、園児たちにも話している連続する物語が乗っています。その意味する内容は、正義の神の導きに聞き従えない人間、その過ちに対する神の審判があり、人間は自己の罪を悔いて改め、神は赦して祝福し、人は新たな生き方をするという一貫した人類救済の作品です。さて、少し今日の聖書箇所の内面に入り込んで考えて見ましょう。

- ・神が天地万物を創造されたその初めに、地は「混沌」であったと言います。日本語ですと、日本の風土にはないので、その内容は十分には分かりません。この状態はヘブライ語では「トーフー・ワボーフー」と言います。古代イスラエルの民は人知（ひとけ）も動物、植物もない、水気も全くない索漠とした荒涼とした不毛の砂漠が住居から離れたところにありましたから、それを思い浮かべたのでしょう。
- ・創造するとは同じく「バーラー」と言います。材料を用いることなく、こうした全く何も無い状態から世界を造りだすこと。これは神のみがなさることですので、ヘブライ語では人間の行為には使いません。ですから、「神は創造された」とは、周辺のエジプトやメソポタミヤの創成神話とは異なり、イスラエルの神がご自身を鮮烈に他の国の神と区別して使った物語です。イスラエルの神が世界の王であることを宣言しています。「深淵」とは底なしの救いのない恐ろしいことであります。闇がその「深淵」の面にありとは、すべての被造物が常に形のない深淵に沈み込む可能性にされていることを語っています。このことは、人類はいついかなる時も、このような形のない、根源的な深みに沈み込む可能性にさらされているという深い思想が底にある。つまり、神から背いた時、人間はカインのように弟アベルを殺害したり、ノアの時代の大洪水を招いたりする。また、背いたということだけでなくエジプトの奴隷になるような試練を与えられることがあります。このように神から見捨てられたと思われるような状態、「混沌」、「トーフー・ワボーフー」に陥った時、神の創造「バーラー」の御心は被造物を救われることを聖書ははじめに語ろうとしている。
- ・「神の霊が水の面を動いていた」古い訳では「神の霊」（ルーアッハ・エロヒーム）が水の面をうごめいていたとあります。創造の行為を前にして、居ても立ってもいられない神の躍動の意思を見る思いがします。
- ・「神は言われた『光あれ。』こうして、光があった。」ヘブライ語では「光あれ。光あれ。」と復唱して強調しております。（**バヨメル エロヒーム イエヒ イエヒ オール バイエヒーオール**）最も崇高な元素としての「光」が初めに造られた。それを見て神は「良し」（トーブ）と言われた。神の創造のみ業に適ったものであると語られた。「良し」と言われたのは「光」こそが、闇の中で溶けていた被造物に初めてはっきりとしていた輪郭を与えたのです。神は言葉によって創造の業をなされる。ご自分と被造物とを絶対的に区別される。言葉によるとは神のご人格が被造物を造ったのである。光さえ、神が造られたものである。神が名を付けて呼ばれたことは世界が全面的に神に属していることを意味する。光が闇に差し込み、光と闇の混合した状態から、神は「昼」と「夜」に分離され、神が良しとされた有益な秩序に形を整えられた。

新約聖書はこの「闇に光が差し込む。」という事実をしっかりと捕えて離しません。大国に挟まれて苦難の道をたどったユダヤ人のメシア待望の思想は神の子イエスの誕生により、

神の国の到来を人類に告げ知らせます。マタイは言います。「ゼブルンの地とナフタリの地、湖沿いの道、ヨルダン川のかなたの地、異邦人のガリラヤ、**暗闇に住む民は大きな光を見、死の陰の地に住む者に光が射し込んだ。**」（マタイ4：15－16）大国に苦しめられて「混沌」、「トーフー・ワボーフー」にあったユダヤの国は新しい王を見たのであります。その「混沌」とは暗闇か死の陰の地か、病の底か、人に言えない罪の苦しみか、人間として生きる望みのないところに、神の権威をもったイエスの光が射しこみ、神の世界の中に招かれるのであります。創世記冒頭の言葉は何百年もかけて、ここまで深く準備されて来たのであります。これが神のご計画であります。

3. ですから、わたしたちは試練の中にあっても、神は常に励まし、祝福されておられることを信じたいと思います。今日の招きの詞は語ります。50年間もの長きに渡り、敵国バビロニアに囚われの身となったユダヤの民は故郷エルサレムに帰れると預言者イザヤが言っても、まだ神の約束を信じきれずに不安の中にいました。その時、神は創造の業を想い出させ、叱りつけ、励まします。

あなたは、なぜ断言するのか、自分たちの道は神に隠されていると。知らないのか、聞いたことはないのか。わたしはあなたを造った神、疲れた者に力を与え 勢いを失っている者に大きな力を与える。わたしに望みをおく者は新たな力を得 驚のように翼を張って上る。走っても弱ることなく、歩いても疲れぬ。と。

わたしたちの人生にはどなたにも神が必ず試練をお与えになります。重い試練は簡単にそこから救われるとは必ずしも言えません。ある友からは「その試練から立ち上がるためには、時間が必要でした。」ともお聞きします。また、末期癌の死のどん底の苦しみの中で、「主イエスはこの苦しみのそこまで、降りて来られて共におられた。」と語って召された友もいました。ご本人にしか分からない形で、神は試練にある友に働きかけるのであります。

そして、このように試練の多い人生の最後をわたしたち自身はどのような形で迎えるのでしょうか。わたしの以前いた教会の先輩は、「自分の葬儀の時はアメージング・グレースを歌って欲しい。」と言っていました。その賛美歌21—451番3節には「思えば過ぎにし すべての日々、苦しみ悩みも またみ恵み。」とあります。この詩を書いたのはなんと、奴隷船の船長であったジョン・ニュートンです。神は真実ですから福音を安売りはしません。彼の行った人生の報いに対して神は彼の魂に、大きな痛みをお与えになったと思わざるを得ません。しかし、救いを求める者、その彼にさえ、天に召されるその日に、神はすべてが恵みの時であったと思わせたのであります。

新年にあたり、神の創造の業は、わたしたちを救われる業であり、イエス・キリストによってそれは天国への道を開いてくださっていることを覚えたいと思います。今年も信仰に燃える年であり、恵み深い年でありますように、お祈りします。